

2021年11月28日 礼拝説教要旨

詩編講解説教87「本当の出自」

詩編87：1～7、ローマ11：36

詩編第87編は「シオンの歌」に分類されます。シオンというのはエルサレムを指しております。例えばこの第87編では1節の「聖なる山」3節「神の都」いずれもシオン、エルサレムのことを言います。以前の第84編と同様この第87編の背景にも巡礼がありますが、イスラエルの人々が巡礼の目的地であるエルサレムを慕う思いが伝わってまいります。「主がヤコブのすべての住まいにまさって愛されるシオンの城門よ」（2節）「ヤコブのすべての住まい」とありますが、イスラエルの人々はカナンに移り住んで以降、部族ごとに各地に点在しておりました。しかしそのすべての地域にまさってシオン、エルサレムを神さまが愛されていると言います。それはエルサレムに神殿があるからです。1節の「聖なる山に基を置き」とありますが、この「基」というのは神殿のことです。このエルサレムにある神殿を目指して人々は旅をしました。2節には「シオンの城門」とあります。エルサレムは城壁で囲まれた街ですから、エルサレムに入るためには城門をくぐるのです。何日も旅をして、ようやくエルサレムにたどり着く。そしてこの城門をくぐる時は感慨も一入ではないでしょうか。それゆえ「歌う者も踊る者も共に言う、わたしの源はすべてあなたの中にある」（7節）「歌う者」「踊る者」とありますが、これは最終目的地エルサレムの神殿に入る喜びを表しています。しかし、どうして時間も労力もお金もかけて、わざわざ苦しい思いをして、そういう巡礼の旅をするのでしょうか。

このことはもちろん律法にその規定があるとも言えますが、イスラエルにとって、エルサレムに巡礼することは切実なことでありました。「わたしはラハブとバビロンの名をわたしを知る者の名と共に挙げよう。見よ、ペリシテ、ティルス、クシュをもこの都で生まれた、と書こう」（4節）ここに幾つかの地名があります。ラハブはエジプトのこと、バビロンはバビロニアのことでこれは当時の大国です。特にイスラエルにとってそこは囚われの土地でありました。出エジプトの国であり、バビロニア捕囚の地です。またペリシテ、ティルスといった地中海沿岸の地域、またクシュはエチオピアのことですが、これらも異邦の地を指しています。この詩編が成立したのは、おそらく捕囚期以後とされておりますが、これらの地域にイスラエルの人々は離散していたのでしょう。ですからその彼らがエルサレムに帰ることには特別な意味があるのです。そこで彼らは自分たちのアイデンティティを取り戻しました。それは何よりも神の民として、信仰の共同体としてのアイデンティティです。それはイスラエルにとっては、これを失ったらイスラエルではなくなるという部分です。散らされた先々で、異教の神々の影響を受けながら、彼らは自分自身を見失う危機感というものを感じていたに違いありません。彼らがエルサレムを目指すのは、何より自分自身を見失わないためです。

皆さんにも故郷があるでしょう。この冬、年末年始は帰省ができるでしょうか。わたしは先月ちょうど一年ぶりに帰省しました。実家に着いて母親の顔を見た時に「ああ、やっと帰れた」と思いました。それは素直に嬉しいことです。このコロナ禍は、何より家に帰ることを妨げています。多くの人々が帰省をためらい、我慢しました。散らされたところで散らされたままであること。しかもそれを強いられる。改めてそれが苦痛であることを感じました。しかし、コロナでもまだ帰れるならいいでしょう。例えば、地震で故郷を離れた人たちがたくさんおります。年を召してもういつ帰れるかわからない。また入院している人、施設に入られた人。家に帰れるかどうかわからない。その苦痛がいかに大きいものであるかを想像します。まさにわた

したちも分断され、散らされる体験をしているのではないのでしょうか。家に帰れること、礼拝に帰れること、それがいかに喜びであるか。その喜びを改めて知るのではないのでしょうか。

そして、ここにはもっと本質的なことが示されております。7節「わたしの源はすべてあなたの中にある」「あなた」というのは神さまのことです。そこにわたしの源がある。わたしはここから来た。だからそこに帰る。神さまの中に帰るといことです。礼拝にくるといのはそういう体験です。そこでこそわたしたちは真に自分自身を取り戻すことができます。

しかし、わたしたちはその源を見失っておりました。自ら神さまのもとを離れていったのです。そこに罪があります。あの放蕩息子のように、神さまのところを出て行った。出て行って初めて知るので。そこは自分の場所ではなかったということ。父のところこそ自分の本当の居場所があったということ。放蕩息子は、我に返って言いました。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ」(ルカ15：17) 本当に自分を満たす場所、帰るべき場所は、神さまのもとにある。わたしたちは神さまから生まれたのです。わたしたちは神さまによって造られました。神さまの形として、神さまから命の息を吹き入れられている存在です。だから神さまのもとに帰る。それは極めて自然のことです。礼拝に来ることは特別ではない。自然のことです。

そのことを確かなものとするために、イエス・キリストはこの世に来られ、十字架とよみがえりの御業をもって、わたしたちの罪を贖い、わたしたちを神の子としてくださいました。「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」(ガラテヤ3：26) 洗礼を受けてキリストに結ばれることで、わたしたちは神さまの子として登録されます。今日の詩編にある「主は諸国の民を数え、書き記される。この都で生まれた者、と」(6節) これは住民登録の言葉とされています。クリスマスの物語にヨセフとマリアがベツレヘムに行って住民登録をする話を思い起こします。クリスマスの出来事、主イエスがお生まれになられたのは、わたしたちを神の国の住民登録をするためであります。今日の御言葉で言えば、「あなたはこの都で生まれた」。わたしたちの出自を明らかにするために主イエスはこの世に来られ、失われていた神の国の戸籍を取り戻してくださいました。それゆえに、わたしたちはもはや自分自身を見失うことはありません。